日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

2020年４月号
Vol. 14

金のプレートがしめすこと　エスワティニ・シレレ診療所

シレレ診療所前の道路と案内標識

読者の皆さんは、エスワティニにある赤十字社の正式名称をご存知でしょうか。答えは、バファラリ・エスワティニ赤十字社（Baphalali Eswatini Red Cross Society）。バファラリとは現地語でファーストレスポンダーを意味しています。かつてハリケーンが国を襲いどこからも必要な支援が得られなかった時、唯一行動を起こしたのは当時のスワジランド（旧国名）赤十字社のボランティアたちでした。テントを張って支援をしている彼らの姿に感銘を受けた当時の国王が、その貢献を称してバファラリと命名したのです。

今号では初めに、そんなバファラリ・エスワティニ赤十字社と今回明らかになった日本赤十字社との深いつながりをお伝えします。

エスワティニ南部にあるシレレ（Silele)診療所は、バファラリ・エスワティニ赤十字社（以下、エスワティニ赤）が全国で運営する3つの診療所のうちの一つで、日本赤十字社（以下、日赤）は2010年以来国際赤十字・赤新月社連盟（以下、連盟）を通じて支援を行っています。この診療所は、今からちょうど30年前の1990年、まさに日赤の支援によって設立されました。現在では当時のことを知る職員も、資料も残されていない一方で、シレレ診療所の入り口に掲げられた金のプレートには、しっかりとその事実が刻まれ、今日においても村人に伝えています。

診療所の看護師長（左）と受益者の女子学生（右）

シレレ診療所の外観。小さな診療所は多くの診療サービスを提供している。

シレレ診療所の評判は高く、他の遠い地域からも患者が来るほどですが、看護師長を務める女性は、HIVや結核治療、母子医療などの臨床面だけでなく、地域全体への貢献を強調します。エスワティニ赤の地域ボランティアは診療所を手伝ったり、村で火事など何かあった場合には診療所に知らせて、ファーストレスポンダーとして機能しているのです。また、診療所が日赤の支援で行っているHIV感染者への食糧配給により、感染者が抗HIV薬を空腹で服用してしまうことがなくなり、健康や栄養状態の改善に役立っています。

現在シレレ診療所が抱えている問題は、救急車が使用できないことです。2019年に診療所が保有していた救急車が故障してしまったため、大きな病院に重症患者を搬送することができずにいます。

シレレ診療所の入口前のプレート。設立当初、診療所の名前はホーロミ（HHOLOMI）だったが1994年に新国王が着任しシレレに変更された。

「産休サンキュープロジェクト」とは

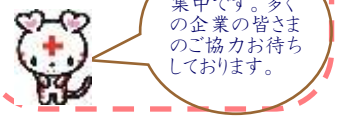
アフリカ地域では、未だ多くの子ども達が、病気や栄養不足により幼くして命を落としています。その率は世界平均の約2倍。また衛生設備の不足や感染症の拡大など様々な課題に直面しているのです。未来を担う子ども達が心身ともに健康に成長するため、継続的な支援が求められています。

新しい命の誕生は、家族にとっても、社会にとっても、大きな喜びです。出産をきっかけに家族と企業が一緒になって、アフリカの子どもやお母さんのための支援に参加してみませんか。日本での産休・育休の取得促進も応援するプログラムです。本プログラムを通じて、アフリカ地域での保健課題を改善する様々な支援を行います。

毎年４月・１１月に発行されるニュースレターでは、ご支援いただいている事業報告のほか、現地の最新ニュースやとっておきの話を紹介していきます。

社内外のプロジェクト支援者への配布や、社内報等での啓発、あるいは貴社・貴団体のCSR活動報告等にご活用ください。

賛同企業　5社
（2020年04月現在）
-住友商事株式会社
-SCSK株式会社
-ヤフー株式会社
-木村情報技術株式会社
-株式会社ローズマロウズ
（賛同開始順）



速報～アフリカの今～

産休サンキュープロジェクトが、アフリカで支援の対象としているのは中・長期的な課題である一方で、自然災害や難民の発生、人口移動、感染症など緊急支援を要する短期的課題も常に発生しています。

ここでは、2019年にアフリカを直撃した緊急事態、そして2020年の今まさに直面している新型コロナウイルス（COVID-19）との闘いについて、連盟や各国赤十字社・赤新月社の活動をご紹介します。

ルワンダ赤十字社のモバイルラジオ（移動式寄席）。村々をすいすい移動でき重宝されている。 ©RRCS

新型コロナウイルス

新型コロナウイルスの世界的蔓延が213の国と地域に及び、感染者数が250万人以上に達する中、現時点においてアフリカは、他地域と比較すると感染者および死亡者数のいずれも低いと言えます。一番の課題は新型コロナウイルスに関する誤った情報の拡散であり、外出禁止やソーシャルディスタンス（社会的距離）といった制約がある中で、いかに正しい情報を伝達するかが重要になっています。

※感染国数、感染者数、死亡者数はWHO調べ（2020年4月24日時点）。

東アフリカ地域 「啓発」

東アフリカ地域では、東アフリカ準地域事務所が主導となって、新型コロナウイルスに関する風評や疑問を纏めたフィードバックや専属の医師によるQ&Aを定期的に発信し、域内各国赤十字社が正しい情報を習得し住民に伝達できるよう工夫をしています。

ボランティアやSNSを通じて得られた頻度の高い疑問や風評を纏めたファクトシート（写真右）

医師のドクター・ベンによる"よくある質問"Q&A（写真左）

ルワンダ

・感染者：153人
・死亡者：0人
・多くの人が密集するモバイルシネマではなくモバイルラジオ放送で住民に啓発

ブルンジ

・感染者：11人
・死亡者：1人
・多くの人が密集するモバイルシネマではなくモバイルラジオ放送で住民に啓発

南部アフリカ地域 「備え」

2020年3月上旬に南アフリカ共和国で南部アフリカ地域初となる感染者が確認されて以来、南部アフリカ準地域事務所が主導となって域内各国赤十字社の新型コロナウイルスの感染拡大に向けた備えを強化してきました。

域内赤十字社10社の感染者数、死亡数、活動内容を纏めて定期的にアップデート。

ナミビア

・感染者：16人
・死亡者：0人
・ボランティアの研修・動員、情報伝達ツールの開発・現地語への翻訳、消毒液の製造・販売にかかるMoUをナミビア大学と締結

エスワティニ

・感染者：31人
・死亡者：1人
・職員やボランティアの研修・動員、3つの診療所用個人防護具の確保、コミュニティへの啓発活動と印刷物の配布

マラウイ

・感染者：23人
・死亡者：3人
・職員やボランティア、医療従事者、国境警備隊の研修、風評追跡ツールの開発

自然災害

2019年、アフリカでは気候変動を原因とする洪水や干ばつ等の自然災害に数多く見舞われ、連盟を通じて各国赤十字社・赤新月社に緊急支援要請がなされました。そのうち日赤は、ケニアの干ばつ・洪水、マラウイの洪水、南部アフリカ地域4カ国（ボツワナ、エスワティニ、レソト、ナミビア）の干ばつ・食料危機などに資金を拠出しました。

©IFRC

©IFRC

エスワティニ

エスワティニを含む南部アフリカ4か国は、2019年12月、過去14か月に渡る干ばつおよび食糧危機により、連盟を通じ各国赤十字社に緊急支援要請を行いました。

左の写真は、日赤を含む各国赤十字社からの支援を受け、エスワティニ赤十字社が受益者に現金支給をしている際の様子です（シレレ診療所が位置するシセルウェニ地域）。支給を受けたのは2020年3月時点で1,299人におよび、調査によると98%の受益者が食糧購入に充当しています。

お知らせ

新型コロナウイルスによる2019年度事業への影響

新型コロナウイルスのアフリカ地域への拡大は、2019年度の東アフリカ地域保健強化事業と南部アフリカ地域感染症事業の実施にも影響を及ぼしています。具体的には、新型コロナウイルス対策が最重要課題となったために現地赤十字社の職員の業務に変更が生じたことや、現地政府の通達により人々の移動の自由が制限され不特定多数の人が集まる集会等が禁止されたことで、事業の終了時期や内容に一部変更が生じています。

ルワンダ赤十字社による新型コロナウイルス対応の様子。ソーシャルディスタンスを保ち活動を実施中。

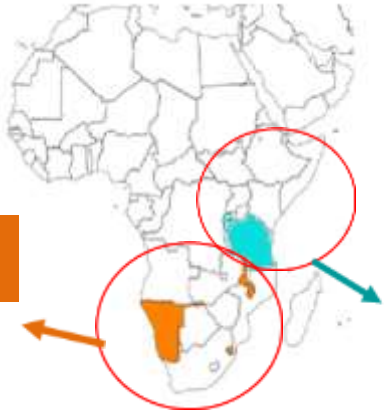
東アフリカ地域	ルワンダ	政府の通達により実施が困難となったモバイルシネマをラジオ放送に変更 事業活動終了時期につき、2020年3月末から1か月延長し4月末に終了予定
南部アフリカ地域	マラウイ	事業年度末に予定されていた関係者間レビュー会議に遅延が発生 事業活動終了時期につき、2020年3月末から2か月延長し5月末に終了予定

2020年度の支援対象国を紹介します

東アフリカ地域保健強化事業と南部アフリカ地域感染症対策事業の支援対象国の見直しを行い、今までの5カ国から新たにタンザニアを加えた6カ国に変更しました。これに伴い、これら2つの事業を支援している産休サンキュープロジェクトの支援対象国も6カ国に変更します。2020年度における各事業は、原則2020年4月に開始し2021年3月に終了予定です。

就学支援や食糧支援

モバイルシネマやラジオ放送で啓発活動



南部アフリカ地域 支援対象国

ナミビア　エスワティニ
マラウィ

国際赤十字・赤新月社連盟
南部アフリカ準地域事務所

東アフリカ地域 支援対象国

ルワンダ　ブルンジ
タンザニア

国際赤十字・赤新月社連盟
東アフリカ準地域事務所

＜2020年度に支援する国と活動＞

	支援対象国	活動内容
東アフリカ	ルワンダ	アニメ映画とラジオ放送を通じた保健・防災の啓発活動
	ブルンジ	アニメ映画とラジオ放送を通じた保健・防災の啓発活動
	タンザニア　NEW！	**地域啓発活動に係る職員・ボランティアの能力強化/研修実施** **地域からのフィードバック用の無料ホットラインの運営**
	国際赤十字・赤新月社連盟 東アフリカ準地域事務局	上記3カ国への支援にかかる事業管理
南部アフリカ	ナミビア	キッズクラブ（学童保育）の運営、簡易住居の建設、 就学支援、衛生用品や毛布の送付、共同菜園の運営 HIV感染者及び貧困層の家庭に対する家庭訪問と訪問看護
	エスワティニ	診療所の運営、HIV・結核の検査・カウンセリング・治療、 HIV・結核感染者に対する食糧支援
	マラウイ	保育所の運営、生計支援（家畜の供与）、 HIV感染者市民グループへの啓発活動
	国際赤十字・赤新月社連盟 南部アフリカ準地域事務局	上記3カ国への支援にかかる事業管理

あばばいぇい通信

イビシンな、ルワンダのママのあじ

日本赤十字社は、2019年12月よりルワンダ赤十字社と共同で開始した「気候変動等に対するレジリエンス事業」を現地にて監督するため、日赤ルワンダ代表部を設置しています。今号より、現地のとっておきの話を代表部首席代表の吉田拓がお届けします。

ルワンダ赤十字本社の食堂にて。
ジャガイモ、お米、ホウレンソウなどの上に、イビシンボ（マメ）を「日本昔ばなし盛り」します。

ところ変われば人の好みは変わるもので、世界中で仕事をしていると色々なお料理にお目にかかります。私が赴任した国での現地の皆さんとの定番の話題は、これを食べないと食事をした気になれないという食べ物は何か、です。年齢性別を問わず、どんな言葉でも「ママの味」と言えば、あーそれね！と教えてくれるものです。

ルワンダでのママの味は、イビシンボと言われる豆の煮込みです。赤茶色の金時豆に似たレッドキドニービーンズを塩味で煮込んだ料理で、ルワンダ人が食事するときはイビシンボを食べないと気が済まないそうです。ところでイビシンボ君には大きな問題があります。料理するにはとてつもない時間と燃料が必要なのです。

ルワンダ人は、豆は生から煮る方が美味しいと信じており、3時間火にかけます。大変で毎日は作れないので、1回の調理で数日分をまとめて作ります。家族が数日分食べる分で、豆だけで1,500フランかかります（約160円）。問題は燃料で、炭を使うと豆を買うのと同じくらいかかりますが、薪であれば、その3分の1で済みます。ルワンダの最低賃金は慣例で1,000フラン/日ですので、皆さん、薪を使います。さらに、ルワンダ人は薪で料理することを通して古き良き農村の憧憬を覚え、料理を美味しく感じるそうで、出来れば薪で料理したい、と言う人が多いです。

吉田拓（よしだたく）

日赤ルワンダ代表部首席代表としてキガリに赴任。落花生マメの産地、千葉県出身。南米、カリブ、東南アジア、インドを経て、奇遇にもマメを主食とするルワンダに赴任。

ルワンダ政府も木の伐採を禁止するなど手を講じていますが、農村から町へ薪を山ほど自転車に積んで売りにやってくる薪の売人が後を断ちません。ちなみに1994年の虐殺以降、ルワンダの人口は6百万人から2倍以上に増えており、燃料目的の森林伐採は深刻な問題です。ガスの普及率は1.5%で、国民の8割以上は薪で料理している、というデータもあります。

ルワンダのママの味であるイビシンボと森林の両方を守るために、安い燃料を効率良く使って、短い時間で美味しく料理するイノベーションが求められています。これまでも効率的な窯や、バイオマス燃料などが外国人によって導入されていますが、なかなか普及に結びつかないようです。最近になってお隣のケニアやウガンダでは女性が主体となって短い時間で料理できる調理済みのマメを売る、という実験が成功しているようですので、ルワンダも参考にできるかもしれません。さて、紙面に限りがありますので、続きは次回のニュースレターでお伝えしますね！ごきげんよう！

（つづく）

※あばばいぇい（Ababyeyi）とはキニアルワンダ語で両親という意味です。全国のお父さんお母さんの中で、ルワンダのあばばいぇいに聞いてみたいことがありましたら是非お寄せください！次号でご報告します。ご連絡は下記担当まで。

産休サンキュープロジェクトに関するご意見・ご要望をお寄せください。特に、ニュースレターの内容については、参加企業・団体の皆様とのコミュニケーションツールとなりますので、ご提供いただける情報、どのような情報がお知りになりたいか、素朴な疑問からご感想まで、是非、皆様の声をお聞かせください。また、ニュースレターは、以下のリンクからもダウンロードできます。

http://www.jrc.or.jp/activity/international/document/#産休nl

【お問い合わせ】　日本赤十字社　国際部　開発協力課　産休サンキュープロジェクト担当

電話：03-3437-7089　　Eメール：sankyuthankyou@jrc.or.jp